

氏 名	伊 藤 ましろ
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 429 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	トーマス・マン文学における女性像の系譜

論文調査委員 (主 査) 教 授 西 村 雅 樹 教 授 吉 川 一 義 准教授 松 村 朋 彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、トーマス・マン文学における女性像を、作者の自己像／他者像という分類を設けることによって系統立て、作者の自己像としての女性たちの中に、マンのジェンダーを超えた普遍性への意識を読み込むものである。

本論文においてマンの自己像として捉えられるのは、ゼゼミ・ヴァイヒプロート（『ブデンプローク家の人々』）、エンゲルハルト嬢（『魔の山』）シャルロッテ・ケストナー（『ヴァイマルのロッテ』）、そしてムト・エム・エネト（『ヨセフとその兄弟たち』）の4人である。一方、その比較の対象あるいは議論の深化の契機として、イメージされるのみの「不在の他者」である女性ショーシャ夫人（『魔の山』）を、そして現実の世界に存在を主張し、マンの世界観を揺るがしうる、すなわち「まなざしを向ける他者」であるカーチャ・プリングスハイム（あるいはインマ・スperlマン（『大公殿下』））を論じる。

これまで、マンが自己を投影した女性像というのは、ムトおよびロザリーエ（『欺かれた女』）の二人のみとされてきた。しかし、初期の作品から生涯を貫いてこのような女性が存在したことは、女性への自己投影がマンにとって、目立たないながらも一貫した、決して途絶えることのない重要なテーマだったことを裏付けている。

これらの女性の審美的評価の根拠は、その豊かな心理描写にある。これについては各章において詳細に論じる。一方、彼女たちの倫理的評価の根拠については、これをフランスの思想家ツヴェタン・トドロフの議論に求める。トドロフは、その著書『われわれと他者』において、民族的な「他者」に対して展開される「普遍主義」「相対主義」の思想のからくりを暴き、その両者が危険な「自民族中心主義」に陥ることに警鐘を鳴らす。トドロフは、その双方を退け、自己と他者がともに人間という種族に属するという点、すなわち国家や文化など、生まれ落ちた環境からの制約を「拒否」し、変化していく能力、別の言葉で言えば自由を持っているという点のみを人類に普遍なものであるとする「穏やかな人間主義」を提唱した。そしてマンが女性像をとおして自画像を描いたとき、つまり女性の中に自己と共通する限定的な普遍性を見出したとき、それはマンの中の「穏やかな人間主義」を証明するものだったと言えるのである。

第1部 自己像としての女性たち

第1章 ゼゼミ・ヴァイヒプロート—『ブデンプローク家の人々』における女性像と「宗教性」

ゼゼミ・ヴァイヒプロートはトーニ・ブデンプロークの寄宿学校の教師として登場する端役の老嬢である。しかし、マンの初の長編は、彼女の台詞と描写によって幕を閉じる。この役を担ったのがなぜこのような目立たない端役であって、例えばトーニではなかったのだろうか。その理由を、本論は以下の点に見る。すなわち、本来この物語の主人公として設定されたトーニは、物語の後半において知性を失う。彼女の完全なるナイーブさのなかに、マンは自己を投影する余地を見出せなかったのである。それに対しゼゼミは、登場の当初から、啓蒙主義の書物に触れ、「理性」とキリスト教とのあいだで真実を求めて葛藤する女性として描かれていた。確かに、この物語においてキリスト教の意味は重要ではない。しかし、この作品に描かれた宗教性としては、キリスト教よりもトーマス・ブデンプロークのショーペンハウアーを読む体験が重視されていることを考えるならば、ゼゼミの葛藤はトーマスのものと重ねあわされる。そして彼女におけるいきいきとした心理描写、

またマンが手紙においてゼゼミをこの物語の象徴と捉えていた事実から、マンがゼゼミの中に自己を見出し、大きな共感を覚えていたことは疑いようがないのである。そしてそれこそが、彼女がこの作品の最後を務めた理由であったと考える。

第2章 白いドレスのロッテ―『ヴァイマルのロッテ』における女性像と「恋に恋をする知的な女性たち」

『ヴァイマルのロッテ』はしばしば「ゲーテ小説」としてのみ論じられ、この物語の表題に名前のある「ロッテ」像については、これまでほとんど問題にされたことがなかった。しかし、マンにとってゲーテ的完全性が、決して本当に到達されたものではなかった以上、この作品を「ロッテの物語」として読むことは可能である。そして事実、ロッテは以下のような点においてマンの自画像となる。すなわち、彼女は、単なるゲーテの犠牲者では決してなく、ゲーテの問題性をも見通す洞察力のある批評家でもある。さらに彼女は能動的に「犠牲者」であることを楽しみさえする「恋に恋をする女性」でもあり、その頭の震えによって、「愛と死」を象徴する世界『魔の山』のハンス・カストルプとの共通性を示す。このゼゼミとの共通項、「恋に恋をする」性質と「知的である」という性質は、マンの女性像への自己投影への基本的要素となる。この像は地に足の着いた現実的な描写によってくっきりと描かれる。そして、彼女たちは、マンが「恋をする」という従来女性に与えられてきた性質を我が物とし、「知的である」という従来男性的とされてきた性質を女性像に与えることによって、マンのジェンダーを超えた普遍性の意識の現われとなるのである。

第2部 不在の他者

第3章 ショーシャ夫人は美しいか―『魔の山』における女性像と「東」

ショーシャ夫人を美しいと評価する研究は枚挙にいとまがない。しかし、だとすれば、彼女はどのような観点から美しいと言われているのだろうか。「美」というものが時代の文化的・社会的・政治的状况によって変化する相対的なものである以上、この研究者たちはどのような価値観に立っているのか、という問題が究明されなければならないのである。本章では、彼女が美しいと言われる理由を、次のような点に見る。すなわち、彼女は「聖母かつ娼婦」という19世紀市民社会の中で整備されてきた伝統的でステレオタイプな女性像を典型的に示していたのである。これは、言い方を変えれば、彼女が個人としてはマンの関心の外にあり、「女性原理」としてのみ重要な「他者」であったということでもある。

マンのショーシャ夫人に代表される「女性原理」としての女性像への関心のあり方は、同時代の言説によって「女性性」と深い親和性を持った「東方性」への関心のあり方と大いに重なる。物語を構想した当初、マンにとって「ロシア」あるいは「東方」は、非政治性や保守性、すなわち非西欧の象徴であった。ショーシャ夫人が「愛と死」を表象するのは、まさに彼女がこのような意味でのロシアを体現していたからに他ならない。

ところが、そのロシアに革命が起こる。これはマンにとっては精神的よりどころを失う一大危機であったことが推測される。しかし、マンはこの事態を物語から排除すべく、ワルプルギスの夜のハンス・カストルプとショーシャ夫人の会話に、マンが『非政治的人間の考察』において非西欧性を表象させたドストエフスキーの精神をショーシャ夫人のものとして混入させる。これは、マンが「ロシア」というイメージをなんとしてもその非西欧性において理解しようとしたことを意味すると同時に、マンにとって「ロシア」がその現実を問われることのない「他者」であったことを確認させるのである。

第4章 フロイライン・エンゲルハルト―『魔の山』における女性像と「同性愛」

エンゲルハルト嬢は、『魔の山』のサナトリウムの食卓において、ハンス・カストルプの隣に座る官立高等女学校の教師である。「自分自身のことには何の要求も希望も持っていない」と紹介される一方で、実のところ自分にそう言い聞かせているに過ぎない、恋に恋をするオールド・ミスであり、その知性と葛藤豊かな心理描写によってゼゼミやロッテと同じ系列に位置する。

この女性をこの章に配置するのは、彼女を通して、ここまで問われずに来た根本的な問題を改めて問うことが可能になるからである。すなわち、日記の公開以降同性愛的傾向が前提とされるようになってきたこの作家において、女性とは何か、という問題である。

マンの同性愛的傾向を前提とする研究においては、ハンス・ブリューアーのマンへの影響が重視されてきた。マン自身が「不毛」と形容した同性愛という性質を、マンはブリューアーの思想によってポジティブに解釈する契機を得る。そしてその男同士のつながりを称揚する男性同盟の思想の中で、女性は徹底的に排除されるのである。そのような傾向の表れが、『フリードリヒと大同盟』等戦時中の論説における女性嫌悪の表明であった。

しかし、このような徹底した女性嫌悪は、エンゲルハルト嬢をはじめとする豊かな女性の描写と矛盾する。そこで思い起こされるのが、当時の同性愛の理論に、ブリューアーらの、同性愛を「男性の更なる男性化」と理解する流れと別に、マグヌス・ヒルシュフェルトらの、同性愛を「男性の女性化」と理解する流れがあったことである。そしてまさにマンは、その初期のエッセイ『永遠にして女性的なるもの』において、同性愛的傾向を女性的傾向として、称揚していたのであった。マンがこの二つの同性愛理解を同時に持っていたことを知って初めて、マンの女性像理解は可能となる。すなわち、排除された女性は「他者」となってショーシャ夫人の中に「女性原理」を表した。そして同性愛の女性化として理解された像は、エンゲルハルト嬢の中に、心理描写豊かな像を結んだのである。

第3部 他者のまなざし

第5章 インマ・スパールマンあるいはカーチャ・プリングスハイム—『大公殿下』における女性像とユダヤ性

マンの長編第二作『大公殿下』は、長編小説でありながら、メールヒェンである、という独特の形態をとる。本章では、この事実の中にマンの「他者」への認識の、これまでとは少し違ったあり方を見る。すなわち、インマ・スパールマンあるいはそのモデルとなったトマス・マンの妻カーチャ・プリングスハイムに、当初マンは自己と同じものを、自己の理想像を重ねていた。しかし、カーチャは単にイメージされた女性としてではなく、マンに「まなざし」を向け、マンの世界を動揺させ、苛立たせる「他者」であった。この物語においては随所にその存在の引き起こす不協和音を見ることが出来るのである。

この「他者性」はカーチャがその血を引く「ユダヤ性」の問題とも平行の関係にある。すなわち、マンは当初インマをユダヤ人として構想し、それを後に撤回したのであるが、この事実、一度は高貴なまでのアウトサイダー性を見出し、共感を覚えた「ユダヤ性」が、一筋縄ではいかない「現実」としてマンの認識の中に立ち現われてきたことを推測させる。それは再びトドロフの言葉を借りるならば、他者への無関心ゆえ他者の存在を認めることさえ出来ず、他者には無関係な自分の理想を他者に投影することで満足してしまう「相対主義」が、他者からのまなざしによって修正を加えられる瞬間だったと言える。

第6章 ムト・エム・エネト—『ヨセフとその兄弟たち』における女性像とその政治性

ムト・エム・エネトは、本論においてマンの自画像として紹介した女性のうち、従来の研究においても作者自身との関係を認められていた唯一の女性である。それには、彼女の心理描写にパウル・エーレンベルクへの想いを綴ったメモが使われていた、という事情がある。一方で、彼女に対するバハオーフェンの影響は古くから論じられてきた。同時に、マンはアルフレート・ボイムラーの著作を通じてバハオーフェンを「誤読」し、バハオーフェンをナチス的なものとして警告していたという事実があり、近年ではムトをナチズムのアレゴリーとする読みも行われている。しかし、この「共感」と「警告」という相反する立場の存在そのものについてはこれまで問題にされてきていない。本章の目的は、まさにこの矛盾の共存を問題にし、その関係を明らかにすることにある。

その回答は次のようなものになる。すなわち、マンはバハオーフェンに、そしてその「母権＝死への憧れ」の世界に、危険と同時に自分自身の姿を見出しており、そこにナチス的なものの片鱗を見ていた、つまりまさにナチズムに対して、マンはアンビヴァレントな関心を抱いていたのである。しかしこれは、あくまでもマンのイメージに過ぎない「他者」の姿であった。つまり、マンが『パリ訪問記』においてナチスを「女性的」と評したとき、それはナチズムがマンにとって「女性」がそうであったのと同様、「他者」であったことを示している。これは、対象の現実の姿への無関心を前提としており、それゆえ相手に自分自身の「原理」を投影し、その一方で後にこれを糾弾することを少しも妨げないのである。一方、ムトの場合は少し異なる。ムトにおいてもマンの自己は投影されるが、それはマンの「原理」というよりは「内面」である。しかも、マンはこのムトに「一年目のムト」と「三年目のムト」という区別を設け、一年目のムトにのみ豊かな内面の描写を、そして主に三年目のムトにバハオーフェンのモチーフを与えている。このことは、マンがムトという一人の女性像の中に緩やかな断絶を描き、それによってマンにとって自己の「原理」であるナチズムを自分自身に引き受けながらも糾弾する、という困難な課題に一つの答えを出したことを示している。そしてこの断絶を生じさせたのは、もはや「原理」とは捉えることのできなくなってきたナチズム、まなざしを向ける他者だったのである。

あとがきにかえて—ロザリーエとアンナ

論の最後に、マンの自画像とされてきた人物と序文で紹介しながらも、本文中では論じることのなかったロザリーエ・フォン・テュムラーについて少しだけ触れる。すなわち、『欺かれた女』におけるマンの女性像にまつわる認識論的・政治的構造は、ムトにおけるそれと酷似しているのである。つまりロザリーエにおいて表象されるのは「三年目のムト」のみであって、ロザリーエはこれまで言われてきたのと異なり、マンの自画像ではない。ロザリーエは娘アンナと揃ってはじめてマンの自己像となる条件が揃うのである。しかしこの二人の存在によって、ゼゼミ以来連綿と続いてきたマンの女性像への自己投影が、マンの生涯のテーマとして重要だったことが再確認される。

論文審査の結果の要旨

近年ますます活況を呈しつつあるトーマス・マン研究のなかにあつて、女性像を主題とするものは意外なほど少ない。その理由は、マンの描く女性たちを実体のない「機能」にすぎないと断じたハンス・マイアーの見解に代表されるように、従来の研究においてマン文学における女性像が、個別具体的な豊かさを欠いたステレオタイプとしてとらえられてきた点にある。本論文は、こうした通説に再検討をくわえ、マンの初期から晩年にわたる諸作品の女性像を詳細に分析することによって、その小説世界に新たな照明を当てようとする試みである。

本論文の第一の特色は、従来の研究ではほとんど論じられることのなかった一連の女性登場人物たちに着目することによって、マンの自己投影としての女性像の系譜を明らかにした点にある。マンの最初の長編小説『ブデンブローク家の人々』(1901)を論じた第1章で論者が取り上げるのは、独身の女性教師ゼゼミ・ヴァイヒプロットである。目立たない脇役の一人にすぎない彼女が小説の最後の言葉を語るのはなぜかという問いから出発して、論者は彼女をゲルダやトーニといった主要な女性登場人物たちと比較検討し、理想と宗教とはざまで葛藤するゼゼミが、小説の主要登場人物であるトーマス・ブデンブロークと重ねあわされているだけではなく、彼女の描写にはマン自身の深い共感がこめられていることを論証する。

第3章と第4章におけるマンの代表作『魔の山』(1924)の読解もまた、同じ問題意識に貫かれている。主人公ハンス・カストルプの恋人役として小説のヒロインを演じるショーシャ夫人について論者は、彼女が「聖母かつ娼婦」というステレオタイプの典型であり、男性の想像の産物としての「不在の他者」にほかならないと結論づける。それにたいして豊かな心理描写をほどこされた女性像として論者が注目するのは、ゼゼミとも共通点をもつ独身の女性教師エンゲルハルト嬢である。ショーシャ夫人に恋するハンスの相談役をつとめ、夫人への愛情を彼と共有するエンゲルハルト嬢のうちに、論者はマン自身の同性愛的傾向の投影を見てとるのである。

第2章で取り上げられる『ヴァイマルのロッテ』(1939)のヒロインであるロッテは、この作品のタイトル・ロールであるにもかかわらず、従来の研究では十分に論じられることが少なかった。その理由は、この小説がもっぱら「ゲーテ小説」として読まれてきた点にある。それにたいして論者は、この作品を「ロッテの物語」として読みなおそうと試みる。論者は、ロッテがゲーテのエゴイズムの単なる犠牲者であるだけではなく、ゲーテにたいする洞察力豊かな批評家でもあり、犠牲者であることを楽しむ能動性すらそなえていることを強調する。こうして、ゼゼミからエンゲルハルト嬢、ロッテをへて『ヨセフとその兄弟たち』(1933-43)のムト・エム・エネトへといたる「恋に恋する知的な女性たち」をマンの自己投影の系譜としてとらえる論者は、そこにジェンダーを越えて女性という他者のうちに自己を見いだそうとするマンの普遍主義的人間観のあらわれを見いだすのである。

だが論者によると、マンの女性像のうちには、自己像ではなく他者像としてとらえるべきものもまた存在する。こうした他者としての女性像を、社会的、民族的、政治的な次元におけるマンの他者理解と関連づけて考察する点に、本論文の第二の特色はある。第3章で論者は、『魔の山』ショーシャ夫人がロシア人女性として設定されている点に着目する。すなわちここでは、「不在の他者」としての女性像に、西欧にとっての他者としてのロシアのイメージが重ねあわされているのである。だがこの作品の執筆中、革命によってロシアのイメージは大きく変化する。こうした政治的背景をふまえたうえで論者は、マンがショーシャ夫人に革命以前のロシアのイメージを体現させようとしたことを明らかにするのである。

第5章で論じられるマンの長編第二作『大公殿下』(1909)は、マン自身の新婚生活の反映であり、ヒロインであるインマのモデルはマンの妻カーチャであると考えられている。論者は、この作品におけるメールヒェン風のハッピーエンディング

グとそれにたいするリアリスティックな留保とのあいだの矛盾を、カーチャを自己の理想像としてとらえようとするマンの試みが、実在する他者としての彼女によって妨げられた結果として説明しようとする。カーチャがユダヤ系であったことから、ここでは他者としての女性像にユダヤ性の問題が重ねあわされる。インマは最初ユダヤ人女性として構想され、この構想は後に撤回されることになるが、論者はこの過程のうちに、マンが他者としてのユダヤ人に自己投影を試みて失敗したこととの反映を読みとるのである。

第6章で論じられる『ヨセフとその兄弟たち』の女性登場人物ムト・エム・エネトは、従来の研究においてもマンの自己投影とみなされてきた。だがその一方で、彼女はパハオーフェンのモチーフを介してナチズムのアレゴリーとしての性格をもそなえている。論者はこの矛盾を解明するために、マンのナチズムにたいする両義的な関心を指摘したうえで、ムトの描写が小説のなかで変化しており、「一年目のムト」にはマンの自己投影の要素が、「三年目のムト」にはナチズムへの批判が見いだされることを実証する。マンは一人の女性像のうちに「緩やかな断絶」をもうけることによって、ナチズムを自分自身に引き受ける一方でそれを批判し、同時に、自己投影としての女性像と他者としての女性像を統合しようと試みたのである。

こうして、自己と他者という二つの観点からトーマス・マン文学の女性像を読みとこうとする論者の着眼は、従来のマン研究には見られなかったものである。そこには複雑な事柄をいささか単純化しすぎる傾向も見られはする。しかし、マンの主要な長編小説のほとんどを視野におさめたうえで自己投影としての女性像の系譜を提示したのみならず、女性像の問題が社会的、民族的、政治的な次元における他者性の問題とも深くかかわっていることを明らかにした点において、本論文はスケールが大きく創見に富むすぐれたトーマス・マン論として高く評価することができる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年2月16日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。